親子礼拝説教ガイド
2023年10月

日本キリスト教団平塚教会

【年間テーマ】自分の願いを知る

ひとつのことを主に願い／それだけを求めよう

（詩27より）

【10月のテーマ】　願いごとは　かなう　かな？

　神は私たちの祈りを「必ず聞いてくださる」というのが教会の教えです。しかし祈った通りにはならないのが現実です。そのためか、教会は「神は、私たちが欲しいものではなく、私たちに真に必要な、私たちを本当の幸せにするものをくださる」と教えます。

　たしかに、求めたものが得られなくとも幸せになれればそれで十分です。でも「本当の幸せ」が分からなければ、願いが叶わない時には幸せが感じられません。

　私たちの願いごとは、神さまがご覧になったら正しくないのかもしれません。それでもその時々ではどうしても必要と感じるから願うのです。「なぜ私は必要を感じるのか」など、自分の願いを、自分自身から一歩離れた立場で考えることができると、願いごとが多少は洗練されて行くでしょう。すると「本当の幸せ」が何かも分かってくるかもしれません。

10月1日　ヨハネ福音書　第6章14、15節

そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て「まさにこの人こそ世に来られる預言者である」と言った。イエスは人々が来て自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

《聖書理解のために》

　イエスが大勢の群衆にパンを与えた《五千人の共食》の記事の、当該箇所はその最後に付け加えられています。貧しかった当時、突然食事が与えられたことに群衆は大いに喜んだはずです。ただし群衆が食事を要求したわけではありません。人間の必要を知っておられる主が、ご自分からお与えくださったのです。食事を無料で配るイエスが王になれば、人間の側にとっては好都合です。人々が自分の都合のいい人を権力者に立てたいという願いを主は退けます。

《説教作成にあたって》

　愛する人のために最善と思うことをしてあげたら、その相手から便利に利用されるようになったとしたらどうでしょうか。この時のイエスさまの気持ちを思いやって、主が山に退いて何をなさったか考えてみましょう。

10月8日　ヨナ書　第4章1～3節

ヨナにとってこのことは大いに不満であり、彼は怒った。彼は主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だからわたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしにはこうなることが分かっていました。あなたは恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」

《聖書理解のために》

「ニネベ（地名）行って、神の裁きによる滅びを伝えよ」と神はヨナに命じましたが、ヨナは神に聞き従うつもりがなかったので、タルシシュ行きの船で逃げました（1章）。船は嵐に遭い、ヨナは巨大な魚の中で三日間過ごしました（2章）。助かったヨナは、今度は神の言いつけ通りにニネベに行って滅びを告げました。するとニネベの住人は素直に悔い改めたので、ヨナの預言に反して滅びませんでした（3章）。ヨナの予告が外れたことになったので、自分に滅びを告げる役割を与えた神に対して腹を立てているのが4：1～3です。

《説教作成にあたって》

ヨナはニネベが救われたために激怒しています。これではニネベが滅びることを望んだことになってしまいますが、ヨナの元々の願いはニネベの滅びではなかったはずです。現実に振り回されている間に、自分の真の願いとは別のことを目指していたことと、それを何かの導きで引き戻された体験は誰にでもあるのではないでしょうか。思い巡らしてみましょう。

10月１５日　ヤコブの手紙 第1章5節

あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。

《聖書理解のために》

初代教会では様々な教理が乱立しましたが、淘汰が進んで「人は行いによってではなく、信仰によって義とされる」と信じた教会が残りました。そうした教会が「行いは不要だ」という行き過ぎた考えにならないように書かれたのがヤコブの手紙です。行いが大切であるということとともに、舌（不用意な発言）と金銭が身を滅ぼすということが繰り返し語られる手紙です。技術の発展のためにも、また貧

困から抜け出すためにも、高等教育が求められる時代です。人はみな知恵を求めますが、当該箇所に反して祈ってもテストの点は上がりません。ヤコブ書全体から考えた場合、知恵とはテストの点が上がることではなく、舌と金銭を制御して幸せになることなのかもしれません。

《説教作成にあたって》

　幸せになるために必要な道具（舌、金銭など）でも、間違った使い方で人を不幸にします。自分には知恵の足りなかったと感じたことと、それを乗り越えて幸せになった経験を思い出して紹介してください。

10月22日　マルコ福音書　第5章 6、7節

イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから苦しめないでほしい」。

《聖書理解のために》

　悪霊に取り憑かれ反社会的な生きかたをしていた男が、イエスの来たことを知ってイエスの許に駆け寄った場面です。イエスはこの男の中から悪霊を引き出して豚の群れに乗り移させたので、豚の群れは全滅しました。男の健康は快復してイエスに従うことを申し出ましたが、イエスは

その地に留まって隣人に神の恵みを知らせるよう命じました。

《説教作成にあたって》

　悪霊の取り憑かれた男が「かまわないでくれ」と言っていることから、男の望みは放置されることと分かります。それなのに自分からイエスに走り寄ってひれ伏したのです。願いと行動が分裂しています。心の表面では悪いことを願いながらも、心の奥底では清い尊いものを求めていたのでしょう。矛盾した逆の気持ちを抱えているのは、親子礼拝の語り手も聞き手も同じです。矛盾した気持ちの中で、尊い方を選ぶことができた喜びを語りましょう。その時には神の導きがあったに違いありません。

10月29日　使徒言行録 第7章59、60節

人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。

《聖書理解のために》

　初代教会では、十二使徒を補佐するために、信仰に優

れ人格に秀でた七人が選ばれました（使徒6：5）。その一人であるステファノがユダヤ人に説教するとユダヤ人は激怒しました（同7章）。ステファノが正しければ、ユダヤ人にとっては今までの熱心な信仰態度が否定されることになります。そこでユダヤ人には神を冒瀆しているように感じられたからです。ユダヤ人たちは、ステファノを石で撃ち殺しました。ここで採り上げたのは死ぬ直前のステファノの祈りです。

《説教作成にあたって》

　説教する人が伝承されたステファノのように生きることは難しいですが、信仰の模範に対する憧れを語ることはできるかもしれません。他にも月間テーマとの関連から別な角度で話すことも可能です。ステファノの最後の願いは、死に行く当人にとっては叶うか叶わないか、確かめることができません。願う人にとっては、叶うかどうかよりも願うこと自体が大切である祈りもあるのかもしれません。私たちの最後の願いはどういうものでしょうか。それらを想像することは、心を神と永遠に向けることになります。結論はなくとも、聞き手の霊は養われるでしょう。